

柳内たくみ 著

Yanai Takumi



ゲート

GATE
SEASON 2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

4. 漲望編

GATE SEASON 2 4: EXPECTATIONS PERVADE

その他の登場人物

プリメーラ・ルナ・
アヴィオン 亡国アヴィオン王家の血を引く姫。
シュラ・ノ・アーチ ティナエ海軍の海佐艦長。
オデット・ゼ・ネヴウラ 翼皇種の船守り。
レディ・フレ・バグ 海に浮かぶ国アトランティアの女王。
黎紫萱 中国人民解放軍の二級軍士長。
シャムロック・
ハ・エリクシール ティナエ「十人委員会」の一人。

石原莞吾

中華人民共和国・人民解放軍
総参謀部二部に雇われた日本人。

リュリュ

妓楼船メトセラ号
三美姫の一人。
褐色の肌を持つ
アンティという亜人種。

ミツチ

妓楼船メトセラ号
三美姫の一人。
黒真珠のように輝く肌を
持つワーレンという
海棲種族。

徳島甫

海上自衛隊二等海曹。江田島統括官付き
として特地の調査任務にあたる。

主な登場人物

江田島五郎

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官
として調査任務にあたる。

メイベル・フォーン

神に見捨てられた亜神。
徳島、江田島とともに行動する。

セスラ

妓楼船メトセラ号
三美姫の一人。
三つ目のレノン種。

特地アルヌス周辺

●ロンドル

帝都●

●イタリカ

○アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

クンドラン海

●メギド

アトランティア・
ウルース

アヴィオン海

トユマレン

碧海



序

特別地域／アトランティア・ウルース

特地アヴィオン海とクンドラン海のほぼ境目^{さかいめ}に、無数の船を鎖^{くさり}で作り上げた王国アトランティア・ウルースが浮かんでいる。

そこは何十万もの海の民が身を寄せ合つて暮らす海上のオアシスだ。

その船群せんぐんの一艘いっそうに、中華人民共和国・人民解放軍総参謀部二部・戦略工作部四局十四処に所属する秘密拠点ヒージョイントが置かれていた。

彼ら四局十四処はこのウルースの他にも、特地世界のあちこちに活動拠点を設けている。

ある者は商社のサラリーマンに扮し、ある者はジャーナリスト、あるいは学者を装い、またある者は背乗りという方法で日本人の戸籍を獲得するなどして、『門』を越え、アルヌスとその周辺に



一つずつ足がかりを築いていった。

しかし、今ではその拠点も減ってしまった。

全てはロウリイ・マーキュリーをはじめとする亜神達の襲撃のせいだ。

「くそっ！ この世界の亜神とやらは、どうして我らばかりを目の敵にして活動を邪魔するんだ!？」

「神なんて無力であるべきだし、某かの力があるとしても公平中立であるべきだ！ なのに日本という国に肩入れし過ぎている！ いや、我々のみを狙い撃ちに過ぎている！」

この特地世界に工作活動の拠点を築いているのは中国共産党だけではない。

日本の仮想敵国であるロシア、大韓民国、北朝鮮はもとより、友好関係にあるアメリカ、イギリス、フランス、イスラエルといった国々までもが、公然と、あるいは非合法的なやり方で、諜報・工作活動を行うための拠点を設けている。

彼らはこれまでアラブの春やシリアの内戦、ウクライナの政変や内乱を演出し加担もしてきた。

民間人を多数乗せた旅客機を撃墜し、散乱した死体から現金や貴金属を略奪した国もある。

独裁者の施政下とはいえとりあえずは安定して平和だった国を、子供や年寄りが次々と死んでいくような内戦状態に追いやり、それでも自由の勝利だと喝采してきた。

余所の国に土足で立ち入り、他国民を力尽くで連れ去るといったことも平然とするし、射殺した兵士の携帯で親に電話をかけ、今あんたの息子が死んだぜ、と告げて悲しみに突き落とすようなこ

ともする。そんな風に、良心など欠片すらも存在していないと思わせる行動を繰り返してきたのである。

当然、この特地世界での彼らの行状も、決してお行儀がよいとは言えない。なのに、それらの国々の拠点が亜神に襲撃されたという話はまったく出てこなかった。狙われるのは、いつも中国の拠点ばかりなのである。

「つてことはさ、自分達のやっていることが原因じゃないかって、気付くべきなんじゃねえの？」

石原莞吾は呆れたように呟く。

しかしアジトの中国人達は、彼の言葉にまったく耳を貸そうとはしなかった。

それは石原が日本人だからということもあるだろう。

教育のせいとか、それとも反日ドラマや反日映画でも見過ぎたのか、日本人の言うことなんかには耳を貸してやるものかという頑なさがある中にはあるのだ。

とはいえ、深層意識まで刷り込まれた反日意識だけでそうなる——という理屈もいささか納得し難い話である。

おそらくは、『正常化バイアス』という、自分に都合な情報は無意識にシャットアウトしてしまう心の働きも影響していると思われる。

そもそも中国人民解放軍総参謀部二部が工作員に下した命令は至極簡単なものであった。

——この『ファンタジー』に混乱を引き起こせ。

そうすれば日本政府と自衛隊は特地に注力せざるを得ない。するとその分、本国第一列島線付近にある日本の海上戦力は減殺される。

そこで彼らは、この特地世界のアルヌスから少しばかり離れた地域に、これまでなかったような武器を生産してばら撒くという作戦を採用した。

技術者が本国から送り込まれ、多くの武器が製作された。

現地ですぐに入れた材料を使った爆発物製造法の手引き書も用意された。

これによって盗賊や海賊といった反社会勢力が力を得て、あちこちの国家が不安定に陥るだろう。海上交通網は寸断され、治安は低下し、物資の不足が各地の人々を苦しめるようになるはずだ。

特地世界の国々では、この新兵器を持った盗賊や海賊に対応することは不可能。鎮圧するには日本が軍勢力を投入するしかないのだ。

作戦は見事に成功した。

海上自衛隊は日本海に配備していたミサイル艇や人員を特地に移動させた。結果、日本海の守りは手薄になったのだ。

これは費用対効果の著しく高い作戦だった。

実際に動いたのは、数十名から百名足らずの作業員でしかない。しかしそれにより目障りな艦艇が二隻も姿を消したのだ。更に武器をばら撒けばもっと多くの艦艇が、もっと多くの人員が最前線から姿を消すに違いあるまい。

作戦の立案者は総参謀部二部から賞賛され、党本部からも高く評価された。

しかもこの作戦は思わぬ副産物をも生じさせていた。単刀直入に言えば、作業員達の懐に莫大な収入をもたらしたのだ。

引き渡した武器の対価として金貨銀貨が続々と集まってくる。まさにぼろ儲けであった。

もちろんこれらは全て党のもの、国のもの、人民のもの。しかしその一部——否、せめて半分、いやいや、出来ることならもう少し多めに——が、苦勞をした自分達の取り分となってもよいのではないかと考えたとして誰が責められよう。

元より中国は『上政策』「上政策は、下対策」というお国柄だ。急速な発展の追い風の中で、抜け目ない人間は巨万の富を得て富豪の称号を獲得している。

貧富や格差のない平等な共産主義だったのに、格差が広がる一方のこの状況には凄まじい不公平感と嫉妬心が渦巻いているのだ。

誰もが我も我もと豊かになることを祈り、願い、期待する。

この発展の勢いもいつかは停まるだろう。それは自然の摂理で致し方ないことだ。しかし自分が豊かになるまでは保つはず、いや保つてくれと願っている。

そんな中で作業員達の前にその機会が回ってきた。濡れ手で粟で儲けられるのに、それをしない理由などどこにある？

いろいろとお目こぼしを貰うための賄賂を上司に贈り、また更にその上の管理者にも贈る必要は

あつたが、そんなものでは尽きない利益で彼らの懐は潤っていったのである。

しかし、異常なはずの状況を、常態化した当たり前のことと考え始めた時、人間は陥穽に嵌まる。彼らはもはやこの立場、この作戦を手放すことが出来なくなっていたのである。

ある日を境に、特地内にある拠点と連絡が取れなくなっていく。

何が起きたのかと様子を見に行けば、地下や船底に設けられたアジトには、鉄が錆びたような臭いと、肉の腐敗した酸っぱい異臭が充満し、床を見れば死体の山が出来ていた。

たちまち胃液の混じった嘔吐の臭いがそこに加わる。

一体、何が起きたのか？ 他国の工作員の襲撃か？ 日本政府か？

警戒態勢が敷かれ、警備体制の強化が求められる、本国からは急遽警備兵が増派された。

しかしその効果は薄かった。

次々と拠点が失陥していく。

死体は積み重なり、貴重な人材が更に失われていった。

この現象が、特地に実在する亜神とやらの襲撃だと分かったのは、その後しばらくしてからであつた。

四局十四処が迷彩組織として乗っ取った『カウカース・ギルド』の所属員が、これまで自分達が何と戦ってきたのかを意気揚々と語ってくれた。

それによると相手は、そんじょそこらの敵よりもタチが悪いらしい。何しろ撃つても叩いても

切つても死なないのだから。

そして不可思議な力で彼らの居場所を暴いて襲ってくるのだ。

連絡の取れなくなる拠点は日増しに増えていった。

しかも折悪しくアトランティア政府の方針転換によつて、ギルドの人材や資材が接收されてしまった。

一時はアトランティアとその女王に影響力を持つまでになったのに、その権威も失われ、関わっていた人材が行方不明になってしまったのだ。

結果として彼ら四局十四処のアジトは壊滅状態となった。

さすがに分かった。理解した。自分達の活動が原因なのだ。

特地にない技術や知識、武器の製造方法をばら撒いていること……それがこの世界におわす神々の逆鱗に触れたのだ。

しかしそれを理解してもなお、この作戦を止めようとは誰も言わなかった。

代わりに彼らが口にしたのは次のような怨嗟だ。

「どうして自分達だけがこんな目に遭う？ もっと他に罰せられるべき人間は大勢いるだろうに！」自分達に原因があるなら、原因となる行為をやめればいい。

しかし誰もそうは言わなかった。多分、きっと、無意識に考えないようにしていたのだろう。

そのことに気付いてしまったら、巨万の富を約束するを手放さなければならないからである。

そう、これこそが『正常化バイアス』と呼ばれる心の仕組みなのだ。

「イシハラ、水と食料の買い出しに行ってこい！」

ウルースに置かれた秘密拠点——といっても古ぼけた木造船でしかないが——で書類を読んでいた石原莞吾は、陳音線^{チンインセン}上尉^{ジョウエイ}からお買物メモと金・銀・銅貨のずしり詰まった革袋を投げられると、素早く中身を確認しながらOKと応じた。

石原がここにいるのは、まさにそういった雑用を引き受けるためだからだ。

「ちょっと待て。お前、今何を読んでいた？」

陳音線上尉は、石原が机に投げ捨てた書類を見るなり言った。

「報告書だよ。学者さんの書いた、こっちの世界の植物とか海藻とか動物とかの調査報告だな。それとこっちは……資源の分布状況の書類。他には……えっと、いろいろだ」

「なんでお前が機密指定の書類に目を通してる!？」

「だってしょうがねえじゃねえか。俺が一番こっちの言葉に詳しいんだから。学者さん達が作った書類を訳してるのも俺なんだぜ。こっちの文書の翻訳部分が間違っていないか確認してくれて言われたらするしかないだろう？ それに、この書類はまだ機密指定されてないし」

「機密指定される予定だ。現地採用の補助員たるお前に触れる権限はない」

「それは正式に提出してからの話だろう？ 提出前だから問題なしだな」

「くそつ、ああ言えばこう言う。口先ばかり達者な輩がいい気になるな！」

「口先ばかり言うたって、それこそが俺の役割じゃん？」

石原は威張る^{いば}ように胸を張る。

そう面と向かって言われると返す言葉もない。陳は肩を落とし深々と溜息を吐いた。

「上尉。そう力を落としなさんな。人間、ストレス溜め込む^いむといふことないよ」

「ストレスの張本人^かがそれを言うのか？」

「言うな言うな。皆まで言うな。あんたの苦労はみんな分かってるから」

どうして人民解放軍は、こんな男を下働きに使わなくてはならないのか。

それは、特地には日本人が多いため、たとえ専門教育を受けた優秀な工員といえども、その存在がバレてしまう可能性が高かったからだ。

これは特地だけの話ではない。人民解放軍総参謀部二部・戦略工作部は、対日秘密工作をする際、同郷人に対する仲間意識を持たない日本人を探してきて雇い入れることが多い。

実際、日本には日本人として生まれながらも「日本が嫌い」「日本人が嫌い」と公言^{はばか}して憚らない人間が一定数いるため、そうした人材の獲得に苦労することはないのだ。

ちなみに石原の場合は、日本を嫌っている訳ではない。

好き嫌いは、出自云々ではなく、会った時の印象で決める人間なのだ。

会ったこともない人間は好きでも嫌いでもない。故に中国や中国人も、そうという理由だけで好

く訳でも嫌う訳でもないのだ。

「ところで上尉、この買い物俺だけで行けつての？ 水の樽^{なん}八個なんて一人じゃ運べねえよ？」

そんな石原は、彼らのリクルートに応じた。

特地語が堪能だった彼は、まずアルヌスでの拠点開設に携^{たづな}わることを求められた。

そこで信用できるかある程度試された上で、このアトランティア・ウルースでの拠点開設と運営に従事するようになったのである。

「黎^{レイゾエン}紫萱二級軍士長、部下を何人か連れて付き添ってやれ！」

「私にあの馬鹿と出かけるとおっしゃるのですか？」

石原に付き添えと上官から指示された女軍人の黎紫萱は、抗議の声を上げる。

丸眼鏡のそばかす顔をいきり立たせて抗議する様子を見ると、石原のことを快く思っていないことは明らかだった。

黎二級軍士長——中国軍の階級制度に詳しくない石原は、『軍曹』くらいに相当するのだろうか」と理解していた。陳の『上尉』という階級は、『大尉』くらいだろうか。

「あの日本狗^{リッポウガウ}をうまく使うのがお前の仕事だ」

陳はこの拠点のリーダー。

本来ならば拠点のトップにはもっと位の^{くわい}高い軍人が就くものだ。実際、これまでは少佐とか中佐といった階級の者が担当していた。しかし度重なる亜神の襲撃によって人員が減って、今では陳が

この世界に残る工作員の最上位者だったのだ。

「私の任務はこの拠点の警備と部下の指揮ですっ！」

「なら、命令を言い換えよう。石原^{シイエン}とともに、買い物に偽装して周辺の警戒パトロールをしてこい！」

この拠点には、黎以外にも下士官級の兵士達が数名、警備要員として所属している。それ以外はほとんどが技術者か学者だ。

技術者はもっぱら武器を製作したり製造方法を手引き書にまとめている。

一方学者は、この地に埋蔵されている資源や動植物の資料を収集する。

彼らも小遣いが欲しいから、暇を見てはこちらの技術環境でも作れそうな爆発物や化学薬品の製造法をまとめているが、本来は資料集めがメインの仕事だった。

「ちよつと来てください」

黎は陳の手を取ると、奥まったところにある台所へと引っ張っていった。

黎は周囲に誰もいないことを確認して告げた。

「あの男は、私の胸をじろじろと見るのです。そればかりか手をワキワキとさせて、隙あらば襲いかかってきそうな怪しい気配を全身から発しています。陳上尉はそれにお気付きにならないのですか？」

黎はよっぽど石原と一緒に行動したくないらしい。

「これだけ魅力的な胸だ。男なら誰だつて触りたがる。触りたいという奴には触らせてやればいいじゃないか？」

陳は無造作に手を伸ばすと、黎の丰满な胸を揉みしだいた。

「実際、俺にはこうして触ることを許しているだろう？」

「わ、私は貴方以外、触れられるのも見られるのも嫌なんです。貴方は私がああ男に身体を触れさせても平気なんですか？」

「そういった私情は捨てる。必要となれば手段を選ばず行うんだ。俺に可愛がってもらいたければ、まずは任務を果たせ。分かったな、黎？」

ゴム鞠のような弾力に満ちたそれは、陳の指を強く押し返し、指の間から溢れそうになっている。その感触を堪能した陳は、尖端部の硬結を指で弾くように刺激した。

「りよ、了解。同志」

黎はびくつと身を振らせる。そして自分の好意を弄ぶだけの陳に対し、恨めしそうな目を向けたのであった。

「くそ、どうして私がこんな奴と買い物物に出かけねばならんのだ？」

石原莞吾は、黎紫萱二級軍士長と数人の兵士とともに拠点を出ると、ウルースで食料品などを取

り扱う船へ向かった。

「そういう愚痴は聞こえないように零してくれよ、黎。俺のデリケートな心がずたずたに傷付いたらどうしてくれる？」

「ふん、ヤスリをかけても傷付かんほど面の皮が分厚いくせに」

「そういうあんたはどうなんだ？ 上尉に弄ばれてるの、分かっているくせに健気じゃん。心臓に毛でも生えてそうだ」

「言うな！ 私だつて自分がどう扱われているかぐらい分かっている。でも仕方ないだろう。それでも彼が好きなんだから！ 大体、私が上尉にいじめられるのはお前のせいなんだぞ！ 彼が私に当たるのは、大抵はお前が上尉をからかったりしたあとなんだ！」

狭い秘密拠点の中では、誰もがストレスを溜め込みやすい。

臨界点を越えた誰かが誰かに当たり散らす。当たられた誰かは、そのストレスを更にまた別の誰かにぶつけて解消しようとする。

まるで『ストレスの玉突き』とでも表現したほうが良さそうな状況が出来ているのだ。

「だとしたら俺に感謝するべきだよな、黎」

だが、一人だけストレスとは無縁そうな石原は嘯いた。

「なんだと？」

「上尉からいじめられても、お前さんが嫌がつてるようには見えないからさ」

「……」

「上尉からいじめられるのが大好きなんだろう？　きっと今夜もストレスを溜め込んだ陳の奴が、お前の部屋を訪ねていくんだ。そしてお前自身も、奴を喜んで迎え入れるんだ」

「し、知ってるのか!？」

「バレてないと思ってるのか？　上尉と黎の関係を知ってる奴、挙手！」

石原の呼びかけに応じて、後ろにいた四人の兵士達が揃って手を挙げた。

みんな楽しそうに笑っている。黎はお前ら仲いいなとつい突っ込みたくなった。

「なんてことだ。隊内の規律が……」

黎は頭を抱えた。

「今更言うかねえ、風紀を乱している張本人が。大体、船の個室の壁って薄いんだぜ。あれもこれもみーんな丸聞こえ。先週の夜も壮絶なハードコア・アダルト動画の音声だけを聞かされてる気分だったぜ」

「い、言うな！　喋るな！　口を噤め！　今後この話題を口にした奴は、殺してやるからな！」

黎は真っ赤を超えていささか黒みがかった顔を俯かせながら、石原達を脅したのだった。

ウルースでは船と船が鎖で繋がれ、相互に行き来できるよう渡橋が据えられている。

海の民達はこれを渡って隣の船へ、更に隣の船群へと渡って、様々な品を商う店へと赴くので

ある。

石原達は、まず水商人の船へと赴いた。

「いつもみたいに水を頼むよ」

ウルースの周囲は海水で満ち溢れている。しかし塩水は飲料に適さない。そのため真水を陸から汲んでくるか、雨水を溜めるかしなければならぬ。

海水を蒸留して真水にする方法もあるが、貴重な燃料を使うので非常に高価になってしまうのだ。「いらつしやい。どの水になさいますか？」

店——要するに船だが——の船倉には大小様々な樽が並んでいる。

石原の目には、それらが造り酒屋やワイナリーにある樽に似て見えた。

水が商品になるという場所柄もあるのだろう、それぞれ一級、二級、普通などの等級が付き、しかも産地別に分類されて非常に高価な値札を付けた水まであった。

特に高いのは、大陸奥地にある氷雪山脈の雪解け水、あるいは極地の氷を溶かした水だ。その中には信じられないことに、一オンス（約三十ミリリットル）銀貨一枚（約八千円）という馬鹿高いものまであった。

「普通等級の真水を樽で八個くれ」

その時、黎が囁いた。

「イシハラ。最近、飲み水に塩気を感じるんだが？」

石原は黎の囁きに頷く。そして商人に警告を発した。

「おい、店主。最近、真水に海水を混ぜて嵩増^{かさま}したりしてないか？」

更に睨むように立っている黎を指差しながら、念入りに続けた。

「そういう馬鹿な真似をしていると、この姐ちゃん^{あねちゃん}が店にやってきて暴れるかもしれないぞ。その結果、痛い目に遭うだけじゃないが、下手をすると誰かが——主にあんただと思うんだが——海に浮かぶことになる。ふかふか——ってな。俺としてはそういう結果は避けたいんだ。顔なじみの水商人がこの世からいなくなるのは寂しいからな。そういう俺の気持ち、分かってくれるだろ？」

「え、ええ。分かります」

黎の冷たい眼光を浴びて水商人は身を震わせた。

「本当だよな？ 信じてもいいんだよな？」

「も、もちろんですとも」

「なら結構だ。飲み水と呼ぶに相応しい商品を出してくれ。そうすれば、お互いに平和でいられる。みんな幸せで丸く収まる。あんたも、あんたの家族も安全でいられる。俺が何を言いたいか分かるよな？」

店主は表情を強張らせながら頷くと、慌てて樽を用意しに引っ込んでいった。

石原の後ろを、真水の詰まった樽を両肩に載せた兵士達が続く。

「よくやった、イシハラ。褒めてやるぞ」

黎がとりあえずという感じで褒めてきた。

石原を上手く使えという陳の指示に従い、成果を出してみせたつもりなのだろう。

「ガキの使い走りじゃないんだ。買い物が上手に出来た程度で褒めるなよ、まったく。そんなことで俺が喜ぶとも思ってるのか？ 本気で俺を喜ばせたかったら——その乳を揉ませろ！」

すると黎は刺すような視線を石原に浴びせた。

おかげで彼の差し出したかけた両手は、中空で停まってしまふ。代わりに黎の手が石原の胸元に向かつて伸びてきて襟首^{えりくび}を掴んで捻^{ひね}り上げた。

「調子に乗るな日本人！ 褒められた程度で喜んでおくんぞ。そうすれば怪我もしないし痛い思いもしないで済む」

「暴力はんたゝい！ 大体、黎は陳の奴に触らせてやれと言われてたろう？ お前、上官の命令を無視するのか？」

「上尉が私におっしゃったのは、手段を選ばなつてことだ！ つまり貴様に言うことを聞かせるためなら、胸以外に拳^{こぶし}を使つても脚を使つてもいいつてことだ！」

「えっと次は、肉と野菜、塩に、香辛料か……」

すると石原はお買い物メモに目を走らせながら背を向けた。そして黎をその場に放置してさっさと歩き出したのである。

「え、ええ!? ちょっと待て、イシハラ!」

黎の手には石原の着ていたシャツだけが残っていた。

シャツや上着を、すり抜けるように脱いでしまうのは石原の得意技だ。

「何してる、黎。ぼやぼやしていると置いていくぞ」

今までのやりとりは何だったんだと言いたくなるほどの豹変に戸惑いすら覚える。要するに、黎はおちよくられているのだ。

付き従っている兵士達もこみ上げる笑いを堪えていた。

「くそつ、貴様って奴は、愚蠢! 笨蛋! 混蛋! 坏蛋! 日本鬼子! ……○×、■△! ☆

◆●※!」

黎は思いつく限りの中国語罵倒表現を、片っ端から並べ立てた。

差別用語、侮蔑用語、日本語には該当する単語どころか概念すら存在しないようなありとあらゆる悪口だ。

周りにいるアトランティアの住民達にはもちろん意味は分らない。ただ、激高していることだけは伝わっているようで、一体何だろうかと皆が振り返っていた。

「はっはー、何を言ってるのかさっぱり分かりませーん」

しかし石原と部下達がどんどん先に行ってしまうため、黎一人だけが注目を浴びることになる。そのため悪口すら最後まで続けられなかったのである。

そもそも石原とはどういう男なのだろうか。

名前は石原莞吾。三十一歳。東京都出身。

生粋の日本人で、かの有名な石原莞爾(かんじ) (帝国陸軍中将。柳条湖事件と満州事変を起こした参謀)の子孫を自称しているが、もちろん嘘だ。

彼は、対外諜報活動という危険な匂いのするダークな仕事にある種の憧れを抱いていた。要するに、テレビや映画によく出てくるタイプのスパイになったかったのだ。

仕える国は別に中国である必要はない。スパイとして雇ってくれる国があったらどの国でもよかった。

「もし先にCIAと接触できていたらアメリカ合衆国のために働いていただろうし、もしCBPと接触していたらロシアのために働いていただろうし、MI6だったら女王陛下のために働いただろうよ。日本に対外諜報活動をしている機関があったら、もちろん日本のために働いていたさ。あ、外務省の情報官つてのはなしね。俺的にはあれ、スパイじゃないから。国際テロ情報収集ユニットは出来て日が浅いから様子見かな?」

彼にとって忠誠心とは、給料と興味深い仕事をくれる相手に対して感じるものであり、何の見返りもない愛国心なんてものはまったく理解できないのだ。

中華人民共和国の代理人と接触して、特地で拠点構築の手伝いをするようになった時、石原は年

甲斐もなくわくわくどきどきして眠れないほど興奮した。

「これから自分は日本の外事警察や自衛隊の情報機関と渡り合うのだと思って、彼らをどう出し抜くかを真剣に考えていたほどだぜ」

ところが実際に彼に求められる役回りはお買い物係であった。

あるいは現地人との交渉役だった。

商人相手に値引きを求め、配慮を要求し、時には脅しつけて彼らの義務にはないことを強要する。そうした役目もまた工作員達が活躍するためには必要だろう。

それが理解できるから不平不満は胸に秘めて仕事に従事している。しかし内心ではすぐがっかりもしていた。

というのも彼が苦心^{くしんさんたん}惨憺^{さんたん}してこの特地で作り上げた拠点に集まったのは、彼の理想を思い描いたような工作員ではなかったからである。

秘密工作員というのは、語学に堪能で、潜入する土地の言葉にもすぐに慣れるのが常識だ。

といっても、そんな常識はテレビや映画で描かれ形成されたものではない。

一人で百人の敵と渡り合える特殊部隊員超人伝説と同じく、印象操作によって作り上げられた虚像なのである。

しかしながら石原はその虚妄^{きやもう}を信じていた。

このアジトにやってくるのも、そうした超人的な連中だろうと期待していたのである。

そして彼らがやってきたら、石原が特地の文化や言葉をレクチャーする。

注意事項を説明し、当面は石原が彼らの活動を先導、あるいはサポートする。

そんな日々の中で、石原は秘密工作活動のコツやテクニクを見習い、盗み取るのである。

自身の抜け目のなさ、有能なところをアピールしていれば、必然的に彼らの仕事を手伝うようになっていくだろう。

きつと充実感溢れる日々が到来するに違いないだろうと思っていた。

「ところがだぜ、実際にやってきたのは、本当に工作員？ と尋ねたくなるほどイメージの異なる連中ばかりだったんだよ。ホントがっかり。もちろん見た目と実質がイコールじゃないのはこの世界じゃ当然のことだろ？ だから俺もこれこそが本職のあるべき姿で、一目でそれと分かるような奴はいないってことだなんて気を取り直したんだ」

石原はこの世界で活動するのに必要なことを彼らに説明していった。

しかし工作員達はそれらには興味がないと言った。

特地の生活に進んで馴染もうとせず、言葉すら覚えようとしないう。引きこもりのごとく拠点に籠もって己の業務に専念しているのだ。

石原に求められたのは現地に馴染む方法ではなく、観光ガイドのような道案内。

土産物、生活品の購入方法、あるいは女の買い方の説明、時には値引き交渉の肩代わりであった。

「あんたら、本当に工作員？」

「もちろん工作員だ」

一体どういふことなのかと思って陳に問えば、その多くが学者か技術者であるという答えが返ってきた。

「工作員ってそっちの工作かよ……ひでえ間違いだ」

彼らが工作員であるのは間違いではない。しかし彼らはひたすらアジト船に籠もって、火薬の製造方法の解説書を作ったり、木材や鉄材で武器や道具を作ったりしていた。

つまり、この世界には存在しない道具の製作活動のためにやってきた。その意味での工作員だったのだ。

当然、彼らをサポートする者が必要だ。だからこそ石原が雇われたのだ。

陳上尉は石原を慰めるように肩を叩いた。

「そうがっかりするな。そもそもこっちの言葉がすぐに使えるようになった連中は、ギルドに潜入しているんだよ。お前が想像しているような能力を持つ奴らだっている。けど、そういう優秀なのは、そもそもこんな拠点なんぞに居つくこともなく、一人静かに潜伏するもんなんだ。だから滅多に会えないのさ」

「ほんとかねえ」

この頃には石原にも多少現実が見えるようになっていたため、陳上尉の言葉もかなり怪しく感じ

られた。しかしその言葉に悪意はないようだから騙されてやることにした。

自分は今でこそ不遇な境遇に置かれているが、待っていればいずれ優秀な連中とともに血湧き肉躍るようなスパイ活動に携われるはずだ、と思い直したのだ。

それまでは、ひたすら我慢である。しかし、この拠点にいる限り、その時は来ないだろうなあと、も気付いていた。

石原に見える範囲では、正規の訓練を受けた工作員は陳上尉しかいなかったからだ。

彼は軍人で、しかも特殊部隊出身らしい。

日本語も堪能で、特地の言葉もすぐに覚えていた。それだけに敬意を表すことに何の躊躇いもないのだが、彼の部下達となるとからつきし駄目であった。

秘密工作活動はバイオレンスとも無縁ではないから、もちろん荒事もこなす。しかし彼らはただの兵士だった。刺々しく禍々しい部分を隠すということを知らない、ただの暴力馬鹿達なのだ。

聞けば、香港デモに地元警察の制服を着て赴いたことがあるとか。

犯罪人容疑者引き渡しに関する条例改正反対の抗議活動をする市民相手に、容赦なくビーンバツグ弾を放ち、倒れた者は取り囲んで警棒で乱打し、催涙ガスを噴射する。そういう活動に従事していたという。

黎なんかはその代表格みたいな女だったので、思わずげんなりした。

陳に習ったのか、特地の言葉を片言でも操れるようになったことは評価できるが、それとて一目

惚れた陳の気を惹くために努力しただけだ。

「まるでヤクザの情婦だな」

映画なんかでは、こういうキャラはやられ役かお色気要員だ。

その手のAVだったら、敵に捕らわれて延々と拷問を受ける役回りだ。

「貴様、何をジロジロと私の身体を見てるんだ？」

そんなことを思い巡らしていたら、無意識に彼女の肢体に目を向けていた。

これだけは全世界の男が認めるだろうと思われる形のよい乳房。衣服の下に隠しても隠しきれないその隆起に見入ってしまったらしい。

これでもう少し顔が良かったらなあ……と、いささか残念に思う気持ちをポロリと口にしてしまふ。

「き、貴様！」

おかげで石原は、黎の憎々しげな視線と罵倒を再び浴びることになったのである。

石原達は買い物を終えてアジトに戻った。

だが帰ってみると、アジト船——それほど大きくはないが、それでも全長二十五メートルくらいはある木造船——が傾いていた。

何があったのか、船体が破損して後部甲板が既に海面下に沈んでいたのである。

未だに沈没していないのは、前後左右の船と鎖で繋がれているからに他ならない。

周囲の船の甲板には、何があったのかと様子を見に来る野次馬が集まっていた。

「なっ!？」

黎達は荷物を放り出すと、野次馬をかき分けて駆け寄った。

少し遅れて石原もその後を追った。

傾いて後ろ半分が波に洗われている甲板に飛び移り、梯子段を下り薄暗い船内へと入る。

するとそこに見えたのは、累々と横たわる死体だった。噎せ返るほどに充満した、錆びた鉄の臭い。血だ。それは血液の臭いだった。

「陳上尉！」

黎が叫ぶ。すると死体の山から声がした。

「れ、黎……来るな！ 止まれ！」

思わず駆け寄ろうとする。しかし陳の警告に無意識に従って立ち止まったのが幸いした。黎の鼻先を掠めるように、何かが空を切ったのだ。

黎はようやく気が付いた。暗い船倉の中に屹立する、黒い人影に。

「だ、誰だ、貴様？」

暗さに目が慣れてくるとその姿も見えてくる。

それはフリルたっぷりの黒ゴス衣装に身を包んだ少女だった。

その小さな身体でどうやって持ち運んだのかと心配になるほどの巨大なハルバートを手にしている。

真っ黒な唇が艶めかしく蠢いて言葉を発した。

「わたしいはロウリイ・マーキュリー。暗黒の神エムロイの使徒にしてえ、陸神後は愛を統べる神となる存在よお」

薄闇の中で爛々と輝く瞳を見た瞬間、思わず石原は口走った。

「嘘だろ？ あんたみたいな愛の神がいるもんか!! そんな禍々しい気配を発してるんだ、暗黒の神のなんちゃらつてのは納得できる。だがな、その凹凸に欠けたスタイルで、愛の神だなんて言われたって理解できねえんだよ!」

「何ですってえ？」

「ちったあ、ギリシャの愛の女神像を見習えつての! アフロディーテ像なんかボンツキュツボンのすげえいい女で……あつ」

「……」

背筋が凍り付くほどに冷たい視線を浴びた瞬間、石原は悟った。どうやら自分は死刑執行の命令書に自らサインしてしまったらしい。

次の瞬間、黎配下の兵士達が少女に向かって飛び出した。船倉に満ち溢れていく殺気に、耐えられなくなってしまったのだ。

「撃て撃て撃て!」

「待て、お前達……」

黎が止める間もなかった。四人とも拳銃を構えたと思ったら、それぞれ三発の弾丸を自称愛の神に向けて放っていた。

都合十二発の弾丸がロウリイに襲いかかる。

しかし分厚い鉄の塊がそれを阻んだ。ハルバートだ。

小柄な体躯に一体どれほどの臂力を有しているのか、少女は巨大な鉄斧をひよいと引き起こし、その側面を盾にして弾丸を払いのけたのである。

甲高い音とともに跳弾が船体に食い込む。

「くっ」

兵士達は続けて銃弾を放つ。しかし次の三連射は空を切った。

既にそこに少女の姿はなかったのだ。

「ぐはっ!」

声のした方向を見れば、黎の部下の一人が縦二つに切り裂かれている。噴出する血液を煙幕とした少女がすぐさま次の兵士に肉迫する。

慌てた兵士は拳銃を乱射するが、射線を掻い潜った少女が横殴りに振った戦斧によってあえなく腰斬されてしまった。

「ひい！」

ハルバートのピックが三人目の犠牲者の胸部を貫いた。

「さ、下がれ！」

この狭い場所での近接戦は敵にとって不利。長大なハルバートをこんなところで振り回せるはずがない。

どうせ梁や船体にぶつかって動きが止まるはずだ、と高を括ったのが失敗だった。

あの黒い悪魔は、斧槍が梁にぶつかればそのままへし折り、船体に食い込めばそのまま引き裂いてぶん回してくるのだ。

それを悟った黎は、一人残った部下に後退を指示する。

「黎同志こそ下がっててください」

しかし兵士は手榴弾のピンを抜きながら叫んだ。そしてそれを抱えたまま、自称愛の神に向かって突き進んでいった。

「馬鹿！」

止める間もなかった。

このままでは爆発に巻き込まれてしまうと、石原が黎の腕を握って梯子段を駆け上る。すると手榴弾は数秒後に炸裂した。

「や、やったのか……」

外で爆風をやり過ごした石原と黎は、再び船倉を覗き込んだ。

しかしニヤリと嗤う死神がそこにいた。兵士の勇敢な自爆特攻もこの相手にはまったく通用しなかったのだ。

「く……」

黎が銃を向けようとする。しかし石原が背後から止めた。

「待て待て、そんなもの通用する相手かよ！」

「だが、私は戦わねば、部下達に……」

「馬鹿、部下達のことを思えばこそ、ここは逃げの一手だろ！ 奴らの犠牲を無駄にするな！」
相手が悪いと石原は説得する。戦えば必ず負けると。

「奴らが無駄死にだと!?」

「お前が死ねば無駄死にだ！」

その時だった。二人のいた甲板が床下から炸裂する。

直下からハルバートを一閃させたロウリイの一撃が、アジト船の甲板を引き裂いたのだ。その衝撃と破片が余すところなく石原の身体を直撃する。

「ぐはっ」

二転、三転、床を弾んでごろごろと転がり倒れた。

「い、イシハラ」

咄嗟に突き飛ばされたのが幸いしたのか、黎はダメージから逃れられた。彼女は吹っ飛ばされた石原に駆け寄る。

そうしている間にも船倉から死神ロウリイが姿を現す。

黎が銃を構えようとするも、石原は再び銃口を下ろさせた。

「待て、黎、銃をしまえ」

「イシハラ、何故だ？」

「こうなったら俺に任せろ。この相手は、こっちから挑んでいかない限り何もしてこないはずなんだ」

「なんだと、どうして分かる？」

「俺に言わせりゃ、分からねえほうがどうかしてるぜ」

石原は黎に武器を置かせると、何とか脚に力を入れヨロヨロと立ち上がる。そしてロウリイと向かい合うように前に出た。

「お前え、いい度胸しているわねえ」

「ほんと、俺もそう思うぜえ」

「覚悟は出来てる訳ねえ」

その時だった。石原は身を投じるようにして甲板に伏せた。

「な、なによお？」

さすがの死神も、虚を衝かれたように目を瞬かせた。

「これは土下寝……いや、五体投地^{ごたいとうち}といって俺の世界で最上級の礼拝、いな、謝罪の姿勢です！ 申し訳ありませんでした、神様っ！ 失言、いえ、暴言ご容赦ください！」

「お前、何がわたしいを怒らせたか分かてるのねえ？」

「もちろんです！ 貴女が愛の神だなんて納得できないなどと口にして、本当に、本当に申し訳ありませんでした！ ごめんなさい。もう言いません。思いもしません。貴女は最高の愛の神です！ スタイルだって凹凸に欠けてなんかいません！ 小柄なのでそう見えるだけで、実際は結構メリハリあると思います。も、もちろん余所の女神なんかと比較すべきではありませんが！」

「そ、そうよお。他のことは許せてもお、それだけは許せない侮辱^{ぶじよく}だったのよお」
ロウリイは握り拳&涙目で唸^{うな}った。

「はい。おっしゃる通り俺は最低の野郎です。しかし、しかし、しかし、間違いを犯すのが人間。どうぞ命だけのご勘弁を。やり直しの機会をお与えください。どんな罰も受けますから、助けてっ、神様、仏様、女神様っ！」

「ふーん」

ロウリイは鼻を鳴らすと、伏せる石原に悠然たる態度で歩み寄る。そして男を見下ろした。

「ちゃんと分かてる上での謝罪みただからあ、勘弁してあげてもいいわよお」

「か、勘弁していただけるの？」

「ただし、一発、ぶん殴らせなさい。そうしたらおあいこってことにしてあげる」

「お、おあいこですか？」

「そうよお。言葉の暴力ってえ、時として刃物よりも相手の心を深く傷付けるんですからねえ」

拗ねたような声を出しつつ、ロウリイはハルバートを伏せた。

石原もロウリイの裁定に納得したのか、神の鉄槌を受け止めるべく、土下寝姿から身体を起こし、背筋を伸ばして正座へと変えた。

「い、いつでもどうぞ」

すると黒い少女は右手を振り上げた。

子供のような小さな手だ。きつと平手で来るんだろうなと思った石原は、歯を食いしばって目を閉じ、身体に力を込めた。

しかしそれは甘かった。直後に来たのは、小さな子供の平手打ちなんかではなく、鉄拳から繰り出される暴力的な衝撃だったのだ。

頬はひしゃげ、顎の骨あたりから何かが砕ける音がした。

あえて擬音で表現すると、グチャ、メキョ、ガキツ、ゴキツ、ボキリ、メリメリ、ミシミシ、プチプチといった感じだろうか。

奥歯は数本吹っ飛び、それでも衝撃を吸収しきれず、首が捻れ、骨が悲鳴を上げる。筋肉と骨とを繋ぐ腱繊維は千切れていった。

更に運動エネルギーを全身で受け止めた彼の身体は、力のモーメントを表現する捻れ運動を伴いつつ宙に舞った。

石原は思った。

（あ、ヤバイ。俺死ぬ。マジ死ぬかも、あ、死んだ）

そしてそのまま飛翔、船の縁を越えて海に落ちていった。

「い、イシハラ！」

黎は思わず舷側に駆け寄って石原の行方を確認した。すると水柱が上がった後の波間に、すうつと男の身体が浮かんできた。

「イシハラ！」

黎の背後で、パンパンと手を叩く音がする。

その音に、黎はびくつと怯えて振り返った。

死神ロウリイは、黒いフリルたっぷりの衣装を叩いて付着した塵や埃を払っていた。そして黎のことを一瞥すること。

冷たい、感情のない瞳だった。殺されると思った。確信した。逃げなければならぬと分かっているのに、凍り付いたように身動き一つ出来ないでいた。

だが、何も起きない。

愛の神を自称した少女は、もう関心を失ったかの如くハルバートを抱え直すと隣の船に飛び移り、

また更に向こうの船へと跳んでいったのである。

「えっ……」

ようやく黎は気付いた。

あの亜神は自分なんぞまったく相手にしていなかったのだ。先ほどの瞳の冷たさは、殺す必要すら感じてない路傍の石ころを見る目であった。

ならばなぜ、黎の部下達は殺されたのか。

「くっ……何てことだ。何てことだ……」

彼らが殺されたのは、武器を手に残っていたからに他ならない。

あの悪魔が殺しに来たのは、この世界に無用な知識をばら撒く学者や技術者であり、黎達ではなかった。石原が言うように、何もしなければ彼らが殺されることはなかったのだ。

「ぶくぶくぶく……」

そうこうしているうちに背後から異音が聞こえてくる。

振り返ると、石原の身体が海面下に沈んでいくとしていた。

黎としてもさすがに無視は出来ず、海に飛び込んで引き上げてやることにしたのである。

黎は、ボロボロになった石原の身体を甲板に上げた。

半分ほど海面に沈んだ船の甲板は、なだらかな斜面になっていたので、溺れた人間を拾い上げる

のには非常に具合がよく、黎一人の力でも十分だった。

そうして傾いた甲板に石原を転がし終えると、黎は再びアジト船の船倉へと向かう。

破壊された甲板開口部から慎重に梯子段を下りていった。

「陳上尉……」

横たわる無数の死体の中から、敬愛する上官を見つけると揺すり起こした。

すると陳も薄れ行く意識の中で黎に気付いたのか、最後の気力を振り絞った声を上げた。

「れ、黎か……」

「陳上尉、しっかりしてください。二人で国に帰りましょう」

「いや、すまんが、俺はここまでのようだ……」

「そんなこと言わずに。しっかりしてください。傷も浅いです」

「気休めを言うな……自分のことくらい分かっている」

「陳上尉に逝かれてしまったら、私はどうしたらいいんですか？」

黎は言いながら、陳の手を自分の下腹部に当てさせた。

「……まさか。本当か？」

黎のその部分には新たな命が宿っている。その意味を悟った陳は瞑目した。

「本当です」

すると陳は笑いながら、黎の胸に掌を押し当てた。

「お前には任務がある。人民解放軍の軍人として……最後まで任務を……果た……すんだ」

「貴方は酷い男だ」

「言われずとも……分かってる。そういう言い方しか……出来ないんだ」

「くっ……了解しました」

事切れた上官の骸を、黎はその場に横たわらせた。

そして最期の敬礼を送ると、アジト船内部に火を放つ。

仲間の骸や活動の証拠をそのまま残して誰かの手に委ねてしまうことだけは出来なかったからである。

アジト船が燃え上がると、前後左右の船が鎖を切り離した。それまで辛うじて浮かんでいた船は再び沈んでいった。

黎は石原とともにアジト船が波間に没するのを最後まで見送った。そして全てが沈んでしまうと口を開いた。

「イシハラ、我々は撤収するぞ。中央もここまで被害を受けてしまったら、任務の継続は困難だと判断するはずだ。出直すしかない」

陳は任務を続けろと言った。とはいえ冷静に考えれば、工作活動を黎一人で続けるのは無理だということとは誰にだって分かる。彼女は専門教育も受けていないただの軍人なのだから。ならば陳の

言い残した任務とは後始末をしてここを去ること。事の次第を上級指揮官に報告して任務は完了するだろう。

「……う、うう、おりやもうる」

だが石原は何かを話そうとして顔を引きつらせた。

頬や顎が痛いのだろう。声は辛うじて出せても言葉になっていない。

「仕方ないだろう？ 私一人でどうしろと言うんだ。武器もない。人手もない。ないない尽くして達成できるような任務ではないんだぞ」

すると石原は顎の痛みを堪えて必死に言葉を紡いだ。

「それから、おりやも……いる」

黎は石原が「だから、俺もいる」と言っているのだと気付いた。

「お前がいたところで焼け石に水だ。一人が二人になったって大差はないぞ」

「れ、黎……俺のしらは……まだ、あるか？」

「は？ しら？ もしかして舌のことを言ってるのか？」

こうして会話できているのだから舌はあるに決まっている。黎は、何を言ってるんだこの男は、というような目で石原を見た。

「し……舌は、ある、か？」

「もちろんまだ付いてる。でなきゃ喋れるか、馬鹿」

「ならら……らいじようぶだ。俺にはしらが……ありさえすれば……十分だ」

石原は言い切る。

「何を馬鹿なことを……」

黎には石原を信じる事が出来なかった。それどころか、こんなボロボロな姿になってしまつて今更何が出来なのかと詰_なりたい気持ちのほうが強かつたのである。

* *

日本の地方自治における行政区画は都道府県である。

いや、「あつた」と過去形で言うべきか。特地のアルヌスとその周辺を帝国から割_{かつじよう}讓されてアルヌス州が出来た、つまり州が加わつたためだ。

選挙が行われて州知事が決まり、州庁舎も作られた。更に、日本全国の自治体から人材支援を受け、アルヌス州は地方自治体として曲がりなりにも機能し始めていた。

今や州内には様々な機関、施設が作られている。

道路、水道、下水道、ゴミ焼却施設。

警察、消防署なども作られた。

民間企業も資本を投じ、銀行や郵便局、電力やガスのインフラ設備も整備されつつある。

しかし先住民の文化や生活スタイルを破壊しない配慮を求める条約が定められた結果、便利だからという理由であれもこれも作れることは出来なかった。

その最たるものが、学校かもしれない。

特地ではどんな内容をどのようにして教育するか。これまであつた知識を体系化しつつ、教育制度のすり合わせ作業から進めなければならぬのだ。

一方、整備に誰も文句を言わなかつたのが医療施設だ。そのためアルヌス州立病院は何よりも優先して建設された。

この日、その州立病院の玄関前に、テレビや新聞社の取材陣が詰めかけていた。

『海賊集団アトランティア』によって中毒性薬物の依存者とされてしまった少年少女——パウビーノ達に乗せた担架が夥_{おびただ}しい列をなして運び込まれていたのだ。

「一体何があつたのです？」

「君達のお父さん、お母さんはこのことをご存じですか!？」

「通してください、道を塞がないでください!」

カメラの砲列と、突きつけられるマイクに対し、少年少女達はもとより病院のスタッフも始終無言を貫き通している。当事者達は答えられる状態になく、守秘義務を課されているスタッフは答えの意志がなかったからである。

そのため記者の幾人かは患者やその家族のふりをして病院内部にまで潜り込んで、少年少女達の

姿を直接カメラに収めようとした。某年二月、ニュージーランドで起きた地震の際にも、日本のマスコミは同様のことをやらかして批判を浴びたのだが、どうにも無反省であつたらしい。

だがそうした者はたちまち病院職員に見つかり、制服を着たワーウルフの警備員に摘み出されていった。

その際に記者の発した「報道の自由を尊重しろ！俺はこの事件の悲惨さを皆に周知するために働いてるんだぞ！俺は国民の代表なんだからもっと敬え。もっと特別扱いしろ！」という罵倒は、周囲にいる誰からも共感を得ることなく、ただひたすら軽蔑の視線を集めることになったのである。

特地のアルヌス州と日本は『門』のみを通して繋がっている。

『門』は常時開いている訳ではなく、開閉も不定期だ。そのためこのニュース映像が日本全国に報じられるまでには、相応の時間を必要とした。

『……こうして多量の薬物摂取を強いられた青少年達五百五十四名が保護された訳ですが、アルヌス州立病院にはそのうちの僅か百四十人が収容されたに過ぎません。比較的症状の軽い子供達はティナエ島に残されており、逆に症状の重い者については『門』が開き次第、都内の大学病院に運ばれることになるそうです。しかし事件についてはまだ詳細が発表されていません。このような痛ましい事件は何故起きたのでしょうか？多くの子供達を平然と犠牲にすることを厭わない海賊は、何故発生したのでしょうか？多くの子供達が命を奪われなければならなかったのは、一体何故で

しょうか？これらに答える責任が、日本政府にはあるはずです！』

病院の画像を背景に、「何故」を繰り返すアナウンサーの言葉を聞いた海上自衛隊一等海佐江田島五郎は、銀座のビアバーにあるカウンターに片肘を突いて呟いた。

『坊やだからさ』……と、彼だつたら言つてしまつたりするんですかねえ？』

事の真相を知る江田島としては、「何故」を乱発されるとつい混ぜっ返したくなつてしまうのだ。何しろこの映像が撮られたのは五日も前だ。その証拠というか映像には、江田島や徳島の姿も映っている。

現在の技術では、アルヌスで起きたことを即座に銀座に伝えることは出来ない。そして『門』が開いたのは昨日だった。だからこの事件の初報も昨日だったのだが、今朝、今夕、そして今夜にわたつてまで引き続き報じられていた。

この繰り返しにはさすがに他意を感じざるを得ない。

江田島の独り言に近い言葉に応えたのは、同じく海上自衛隊二等海曹の徳島甫だった。

「さすがにそれはないと思いますよ。伊丹さんって、わりかし空気読みますから、不謹慎の誹りを受けるようなことは避けて通ります」

徳島は江田島が名指しすることを避けた人物の名をはっきりと口にした。

徳島と江田島は仕事上の相棒だが、二人にとつて伊丹とは「彼」の一言で通じてしまう存在なのである。

ちなみに江田島は徳島の上司だ。

江田島が考え、命令し、責任を負う。そして徳島が実行する。

極稀にこの役割分担が逆になることもあるが、二人はそんな関係で特地とこちら側を行き来しつつ任務を遂行してきたのである。

そして今回の仕事も上手くいった。

「特地に条約違反の技術や知識を移転している者達を探る」という本来の任務の手がかりを獲得した上で、薬物漬けにされた少年達を助け出すことにも成功したのだ。

更には、アトランティアによるアヴィオン海諸国の征服も未然に防いだ。

アトランティア軍を壊滅させたとか、完全にその意図を挫いたとかまではいかず、たかだか数ヶ月の時間を稼いだに過ぎないが、少なくともここから先のことを地元の政府の自助努力に期待できるレベルまでには持ち込めた。

これらのことは、もちろん二人だけで成し得たことではない。

海上自衛隊のミサイル艇『うみたか』と『はやぶさ』。特地の風帆軍艦オデットII号の艦長であるシユラ・ノ・アーチや船守りのオデット・ゼ・ネヴュラ、そして乗組員達の献身がなければ何も出来なかった。

味方してくれたアヴィオン海海賊七頭目の一人ドラケ・ド・モヒートやその仲間達のこととも忘れてはならないだろう。

彼らの命を賭した協力があつたからこそ、やり遂げることが出来たのだ。

とはいっても、やはりその中心にいた江田島と徳島には仕事の成功を祝う資格がある。

「では、任務の成功を祝して乾杯しましょう」

「かんぱーい」

二人がジョッキを鳴らした時、報道番組は別の話題に切り替わった。

それは帝国の皇帝ビニャ・コ・ラーダが、国賓として来日しているというものだ。

その映像でビニャは『門』の銀座側に姿を現すと、赤絨毯の上で高垣総理大臣と握手、栄誉礼を受け、柿崎外務大臣の案内でリムジンに乗り込み迎賓館へと入っていった。

日中は総理との会談をこなし、記者会見を行ったという。

日も暮れた今頃は、皇居で天皇陛下主催の晩餐会に出席しているはずだ。

「ああ、分かった。だからさっきのニュースを流したんだ」

突然、徳島が声を上げた。

「きつとそういうことでしょうね。帝国からビニャ陛下が来日されていて、今日は記者会見がありました。だからテレビ局は特地で起きた陰惨な事件の話題を続けたのです。テレビのニュースは、どのように切り取られて報じられるかも問題ですが、話題として取り上げられることそのものにも制作者の意図が含まれています。このニュース番組の制作者は、二つの出来事続けて報じること、帝国に対する悪印象を人々に植え付けたいんでしょう」

「そんなことをして何の意味があるんでしょうか？」

「日本と特地側世界の関係を悪くすることでしょうね。そのことに意味があると思っている人物が放送局内にいるということです」

「最近、あちら側との関係も密接になって来たはずなんですけどねえ。実際、この銀座でも、特地の人々の姿を見かけるようになったでしょう？」

現に二人が呑んでいるこのバーでも、特地の亜人がウエイトレスとして働いている。

ヴォーリアバニーやキャットピープルの美しい姿を見るために、遠くからわざわざ客が訪れるくらいだ。

特地に踏み入るには、予防接種などいろいろと面倒臭い手続きが必要だが、この銀座ならばそうしたことは必要ない。そのためウエイトレスに特地の亜人種ばかりを集めた外国人観光客向けの店すら出来ている。

「はい、お二人さん。お待たせ」

長いケモ耳を持った女性がやってきて、二人の前に追加のビールジョッキを置く。

彼女もまた特地からこちらに来て働くようになった亜人種だ。日本がアルヌス周辺を獲得したことでたまたま日本国籍を得ることになった彼女のような人間が、こちら側世界で少しずつ活動範囲を広げているのである。

そうしている間に、テレビ報道は本日の昼間に行われた記者会見の映像へと変わった。

「陛下。今回の事件についてのご感想は？」

通訳が記者の言葉を翻訳してピニャに囁く。そしてピニャが特地語で答える。

通訳は特地側の女性だ。服装から察するにピニャが創設した騎士団の一員だろう。

女性ばかりからなる彼女の薔薇騎士団は、日本のある種の文化に興味を強く示し、『門』を挟んで双方が接触した当初から言語の習得に力を入れてきた。そのため彼女達の日本語力は極めて高い。「多くの子供達の痛ましい姿を見て胸が痛みます。我が世界の民を救ってくださった二ホンの皆さんのご厚情に篤く感謝申し上げます」

女性記者の一人が手を挙げた。

「帝国は特地にある国々に強い影響力を有する覇権国家です。今回の出来事も帝国の版図内^{はんと}で起こったこと。帝国内では、最高権力者として陛下の責任を問う声も上がっているようですが？」

通訳を介してのその問いに、ピニャが答える。

「余の責任を問う声とは一体誰のものなのか、よかつたら教えてくれまいか？」

「それは……取材源は秘密なので明かすことは出来ません」

「残念なことだ。実は帝国では、皇帝ともなると権力がなかなかに凄くてな、身边にはおべっかを使う者ばかりが増えてくる。だから余としては、余の責任を追及するような気概と勇気を持ち合わせている者を重用^{ちようよう}したいと思っておるのだ」

「そ、そうでしたか」

「今回の出来事は……確かに我が帝国にもある程度の責任はある。それは余の力が足りずに海賊の跳梁を許していることに行き着く。余はそのことに關して強く責任を感じる……」

「責任を感じておられるなら、どのようにしてそれを取るおつもりですか？」

「ふむ。我が国の力をより高めるしかあるまい。強力な軍事力をもって海賊など平らげてしまえば、此度のようなことは二度と起るまい。そのためには二ホン政府並びに国民の皆にご協力を請いたい」

「それがあなたの責任の取り方なのですか？　今回、多くの子供達が犠牲となった原因に、奴隷制度があるとは考えませんか？」

「奴隷制度？　我が国の社会体制の重要な部分だな。その何が問題なのだろう？」

「今回の事件の元は確かに海賊です。しかし奴隷制度のような旧弊が特地での人権軽視の風潮を作っているとも言えませんか？　再発防止のためにも、是非制度の見直しを図るべきです。それをしないで責任を取ったと言えるのでしょうか？」

ピニャは訝しそうに翻訳がなされるのを待った。そして全てを聞き終えると、目を見張った。

「記者殿は余の考えを問いたいのか？　それとも余を説き伏せたいのか？　まさかとは思うが、余をダシに同調する者を求めているのではあるまいな？　記者殿がどのような心積もりでこの場に臨んでいるかは知らぬが、余を相手にしてはそなたを満足させることは難しいと思う。ギロンを求めているのなら、相手を選ぶことだ。プロパガンダなら時と場所と媒体を間違っておる」

ピニャはそれだけ言い終えると、通訳が翻訳して記者に伝えるのを待つのもどかしそうに腰を上げた。記者会見はこれで終わりという意思表示だ。

「陛下ー！」

記者達は更に質問を重ねようと手を挙げる。しかしピニャは軽く背後を振り返って彼らを一瞥しただけで、すぐに会見の席を退出してしまった。

「ところで統括、報告会はどうでしたか？」

テレビのニュースが、わんにゃんもふもふ特集を流し始めると徳島は尋ねた。

江田島は昨日、官邸に呼ばれて今回の任務についての直接報告を求められた。

ピニャの来日と重なったため、官邸は非常に多忙だったはずだが、総理は江田島を呼び付けた。アトランティアとはどのような集団であるかの説明や、事件がどのように起きてどうなったのかを重要視しているのだ。

事の性質上、政府としても慎重を期したいからだろう。

もしアトランティアが国家としての要件を備えているならば、たとえ不法行為、海賊行為であってもそれは当事国同士で行っている軍事活動ということになる。

そうなると日本政府は非常に面倒な事態に陥る。

日本の領土領海領空が侵犯された訳でもなければ、国民の財産生命を脅かす武力攻撃を受けた訳

でもないのだから、第三国たる日本の自衛隊が武力を行使することは許されないのである。

特地における海賊対処法は、相手が海賊であると断言できる時に限って行使できるのである。

今回の徳島や江田島の行動が、超法規活動であったという誹りを避けるためには、「アトランティアは、国家を自称していても実際には領土を持たない。つまり国際法が定める国家ではなく、ただの武装集団で海賊なのだ」と主張できる根拠が欲しいのだ。

江田島はアトランティアとはどんなところであったか、どのような者達の集団であったのかを知り得る限り説明する必要があった。

「報告会。言い得て妙ですね。偉い人達がずらりと並んで私の報告と説明を聞き、今後の方針について話し合うのだから——確かに報告会です」

江田島は笑って返した。

「で、俺達はどうするんですか？」

「現任務の続行、それが結論です」

その時である。突然、江田島の隣りに立つた男性が声を掛けてきた。

「ちよっと失礼します。貴方がたは海上自衛隊の人ですか？」

それはスーツ姿の地味な印象の男だった。

少し言葉を交わしただけでは、面相の記憶が残らない。そんな風貌になるよう、あえて髪型、服装を地味にしているのかもしれない。そう思うくらいに個性の欠落した男だった。

「あなた、誰？」

徳島は警戒心を高めた。

今は徳島も江田島も私服を着ている。携行品も私物だ。その姿を見ただけで海上自衛官だと分かる要素は一つもない。なのはどうしてそうだと分かったのか。

「私はこういう者です」

男は懐から名刺を取り出すと、江田島に差し出した。

「中華人民共和国から参りました。陳羽チンユウと申します」

名刺には在日本・中華人民共和国大使館付き武官と書かれていた。つまりは、人民解放軍の大佐大校だ。

「ほう、中国大使館の武官ですか」

江田島も名刺を取り出そうとする。しかし陳は不要だと止めた。

「貴方は江田島一等海佐ですね？」

「おや、以前にお目にかかったことがありましたか？」

「いえ、初めてです」

「では、どうして江田島さんのことを？」

徳島は尋ねた。

「彼は有名人だからです。私のような立場の者が彼を見かけたら、こんなところであっても、つい

つい声を掛けたくなくなってしまいます。キルギスで出し抜かれた連中は、彼のことを未だに恨んでますよ」

「キルギス？」

徳島は尋ねた。

「昔、派遣されていたことがありましてねえ。それで、陳さんは何のご用でしょうか？」

江田島が尋ねると陳はその隣に腰を下ろした。

「大使が愚痴を零していました。首相官邸に呼び出されて、我が国の工作員が特地で条約に違反する非合法活動をしているという抗議を受けたと。そんな報告をしたのは、貴方ですね？」

江田島は驚いた。

我が政府にしては随分と素早い対応だと思ったのだ。江田島が特地の状況を報告したのは昨日なのに、官邸はもう大使を呼んだらしい。

とはいえ江田島はこう応じた。

「どうして私が報告したと思うのですか？」

陳は江田島の言葉を無視して続けた。

「大使はこうも言っていましたよ。我が国が条約違反をするなど決してあり得ないのに、手柄欲しさにそのような嘘を報告されて迷惑だ、と」

「それはつまり、政府からの抗議を受け入れてくださるつもりはないということですね？」

「ええ。そのような捏造^{ねつぞう}された証拠をネタに恫喝^{どうかつ}されても、我が政府が怯む^{ひる}はずないではありませんか」

「政府が正式に抗議したのであれば、しっかりとした客観的証拠を提示したはずなんですがねえ。それを捏造とおっしゃいますか？」

「ええ。あんなものはいくらでも捏造できます」

「ならば、お国の工作員を生きたまま捕まえてきましようか、と売り言葉に買い言葉で応じたいところですが、たとえそうしたとしても否定なさるんでしょうね？ ……お国の政府ならば、きっとそうするでしょう」

「そんな仮定は成立しません。そのような者は特地にはいないのですから。いない者が捕らえられることなどないのです」

陳は江田島の顔を見据えて、「ない」を強調した。

「いないのですか？」

「ええ、もちろんです」

しばらく江田島はそれを見返していた。何かを考えているらしく、やがて眉根を寄せた。

「陳大校、貴方は我が政府が突きつけた証拠書類をご覧になりましたか？」

「もちろんです」

「どう思われましたか？」

「よく出来てはいましたが、作りものですね」

「全てをご覧になりましたか？」

「大使が持ち帰った書類なら全て見せていただいているはず……全て、だと思いませんか？」

陳は、日本政府から突きつけられた書類の全てを、大使が自分に見せたとは思えないことに思い至ったようだ。だから少しばかり自信がなくなり、言葉じりの切れが悪くなった。

「……」

「……」

またしても二人は沈黙してしまう。張り詰めた空気だけが二人の間に立ちこめていた。

「頭の良い人同士の腹の探り合いって凄いですね……俺にはちよつとしか分かりませんよ」

その時、徳島が混ぜっ返すように言った。

「徳島君……ちよつと黙っていてくれませんか？」

頭をフル回転させているのだろう。江田島には徳島の言葉が雑音に感じられたようで、煩^{わづ}わしいと拒絶した。

しかし陳のほうは逆で、徳島の言葉を救いのように受け止めた。

「徳島さん。今の我々のやりとりが、ちよつとは分かったとおっしゃいましたね。何をどのように分かったか、教えてくださいますか？」

徳島はチラリと江田島を見る。

江田島は仕方ないとばかりに頷いて許可を与えた。

「まず、陳さんが、向こう側にお国の工作員は『いない』と言い張っている理由です。俺と統括は向こうに行ってきました。その結果、『いる』と言っています。特地にはお国の工作員はいるんです。なのにその俺達に、つまり、第三者ではなく実際に向こうに行って見てきた相手に、『いない』と言い張っている。これってどういう意味なのかなと俺は考えました。もしかして馬鹿にしているのかな、あるいは喧嘩でも売ってる？　とも思ったんですが、そんなことのためにわざわざここまで来ないでしょう？　だから必ず別の理由があると思って深読みしてみました」

陳は何も言わずに頷いた。

「いろいろ考えてたら行き詰まってきたので、もしかして本当に『いない』のかもしれないと考えてみることにしました。でも、『いた』のは事実だから、つまり今は『いない』ということかと。かつて『いた』けど『いなくなった』——だから自信たっぷりに捕らえられない、なんて言い張れるんです」

徳島はこの解釈で当たっているか確かめるように、江田島と陳の顔を見る。すると二人とも頷いた。ここまでは正しかったようだ。

「続きは？」

「すみません、お二人が沈黙してしまったので、ここから先は分かりませんでした……」
代わりに江田島が続けた。

「陳さん、これは私の妄想と思って聞いてください。徳島君と違って、私は彼らが『いなくなつた』とは考えていません。きつと貴方がたと連絡が取れなくなつたのだらうと思っています」

すると陳ではなく徳島が問い返した。

「連絡が取れなくなつた……ですか？」

「はい。多分陳さんを含めて、中国本国の認識は『連絡が取れなくなつた』です。ビール缶の中にビールが入っているか入ってないか……傾けても中身が出てこなければ、『空になつた』と推測してもいいのですけれど、実際のところ中身を覗き込んでみるまでは分かりませんからねえ。何かが出口で栓をしていて出てこないだけかもしれませんし。なので『いなくなつた』という結論は出ていないはずなのです」

江田島はそう言うのと、残り少なくなっていたビールを飲み干した。そして空のジョッキを二人に見せびらかすように逆さまにした。

「なるほど。けど、あんまり違いがないように思うんですけど？」

しかし徳島は、両者を厳密に区別する必要性が今ひとつ理解できなかった。

「希望があるかどうかは大きな違いですよ、徳島君。何らかの事情で連絡が取れなくなっているだけなら、彼らはまだ生きているかもしれませんからね？」

「でも、陳さんは今、『いない』って言い切つてましたよね？」

「つまり、突然バタッと連絡が途切れた訳ではない。何が起こっているか、報告は入っていた。

きつと中国の中央としてもそれなりに対策をとっていたはず。けれどそれも虚しく連絡が入つてこなくなつてしまった。結論としては、『いなくなつた』かもしれないと予測できる。けど推測に過ぎない。なんとしても結果を確かめねばならない」

「ああ、なるほど。ようやく理解しました。陳さんは特地に潜入させた工作員がどうなつたのかを知りたくてここに来たんですね。調べようにもその手立てがないから、現場を見てきた俺達を挑発してあたりをつけようと思つた。もし俺達が、もう何人か捕まえているとでも答えたら、かえって望むところだつたんですね」

徳島はようやく理解した。

江田島がそういう解釈でよいかと問いかけるように陳の表情を窺う。

「……」

しかし陳は黙つたままだつた。

「直接尋ねてくれたらこちらにも答えようがあるのに」

「徳島君。無理を言っちゃいけません。中国政府の公式見解は『工作員など送り込んでいない』なんです。彼らがどうなつたか知っているか？　なんて口が裂けたつて聞えませんか。出来ることは、意味深なことを言つたり我々を挑発したりして態度から感触を得る。それだけです」

徳島は陳の顔色を見た。

「……」

しかし陳は表情をビクリとも動かさない。ずっと黙っていた。

「陳大校。貴方のお立場は理解できます。しかしこの質問には是非答えていただきたい。我々の態度や発言から、陳さんはどのように解釈できたか——です。何しろこれは微妙で敏感な問題です。誤解があったらただでさえ面倒な両国関係は更に面倒なことになってしまいますからね」

すると陳はジョッキの身を口に含んだ。

「ここでの会話話は、全て仮定であることを前提としています。正直申し上げれば、貴方がたは、他愛もない酒場での話を深読みし過ぎています。実際には、我が国が特地に工作員を送り込んでいるなんてことはないし、存在しない者と連絡が途絶したという事実もない。しかしながら、私が貴方がたから受けた印象は、その仮定の出来事に、貴方がたは直接関与していないということ。少なくともお二人は関わってない」

「どうやら伝わったようですね」

江田島は安堵したように笑みを浮かべた。

「けど、同時に確信したこともあります。貴方がたは向こうで何が起きているかを知っているのですね？ 原因も分かっている。だからこそ徳島さんは、直接尋ねてくれれば答えようがある、と口にしたのだ」

徳島は自分の不用意な一言が大きなヒントを与えてしまったのだと理解した。

「あちゃー、頭のいい人は、ホントにささやかな一言で裏を読んでいますね」

すると江田島が窘めた。

「それが出来ないようでは、国際社会の中で生き残っていけないのですよ」

「俺にはスパイなんてやっぱ無理だな」

徳島は嘆くように言うど、ぐいっとジョッキを空にした。

江田島は陳の名刺を取り出すと、そこに書いてある内容をもう一度確かめてから尋ねた。

「陳羽さんは人民解放軍海軍でいらつしやるのですね？ ご結婚は？」

「もちろんしております」

「お子さんは？」

「息子が一人」

「お元気ですか？」

「とつくの昔に成人してしまして、今は仕事で遠くに行っています。元気でやっているのかどうか、最近はメールの一通、葉書一枚寄越しやしません。子供なんて、成人したら大体どこの家でもそんなものらしいのですけどね」

「お仕事で遠くにですか……心配ですね」

陳は沈痛な面持ちで頷いた。

この男はここに現れてからずっと表情を変えず感情を隠し続けている。しかし今の表情には本当の感情が含まれていると江田島は思った。

* *

陳大校は徳島らと別れると、銀座の繁華街を離れたところまで歩く。そこで路頭に停車していた黒塗りの大使館ナンバー車のドアを自ら開け、後部座席に乗り込んだ。

「大校、どうでした？」

運転手が問いかけてくる。

「うむ。どうやら今回の件に日本政府は直接関わっていないらしい。ただ、何が起きているかは把握している。それを聞き出すことまでは出来なかったが、おそらく日本と交流のある現地の治安機関による摘発だろう」

「報告には、神とか亜神とかいった記述があったとか？」

「向こう側世界の軍か警察組織の通称か何かだろう。そう考えれば、こんな事態が起きたとしてもおかしくはない」

「しかし、未だに鉄砲も製造できないような連中相手に、我が軍の精銳が遅れをとるはずが……」

「その考えは誤りだ。確かに科学や技術について異世界は遅れている。しかしヒトとしての成熟度や洞察力では我々となんら遜色はない。お前は向こう側の人間を蔑むが、お前の持つている知識はそもそも誰が発見したものか？ 古代人は確かに我々より遅れているが、その古代人のアルキメデ

スこそが様々な発見をしたのだ。貴様にアルキメデスの真似が出来るのか？ アルキメデスに鉄砲を作る知識がないと蔑む資格があるのか？」

「い、いえ……無理です。資格はありません」

「その上、向こう側の世界には魔法なんてものがある。一部においては我々よりも進んでいる可能性だってあるのだ。なのに、貴様のように舐めてかかるからこういう事態になってしまうのだ。馬鹿者め！」

運転手はだんだんボルテージが上がっていく陳の言葉を聞いて、この罵倒が自分にというより、別の場所にいる誰かに向けられた言葉として感じられた。おそらく連絡が途絶えた陳の息子、陳音繰だろう。

「息子さん、心配ですね」

「いや、息子は諦めるしかないだろう。もう自立した大人だ。そして人民解放軍の軍人でもある。私は息子が軍人の道を志した時から万が一もあると覚悟はしていた」

「けれど、上からは引き続き連絡の回復に努力するようにと命令が出ていると聞きます。それはまだ希望はあるということでは？」

「上の連中が諦められないのは、向こうから送られてくる金貨や銀貨のことだろう。ところで、日本政府が我々に突きつけた証拠書類の控えはあるか？」

「え、書類ですか？ ええっと、あるはずです」